旧約聖書　雅歌　愛の歌を二句神歌としてアレンジする試み

小泉友美 KOIZUMI T

目次

旧約聖書　雅歌と二句神歌について　愛 1

旧約聖書　雅歌と二句神歌について　愛

雅歌は旧約聖書内の一冊であり、最初にヘブライ語で書かれ、次々にギリシア語、ラテン語、そして初期キリスト教同体において使われていた日常語 (シリア語、コプト語、アルメニヤ語) によっていた。神秘的婚約を通して地上と天上の愛をうたっている。

神歌とは、神楽歌であり、歌謡の中軸的な意味を有する一面を明らかにすると共に、神歌の流布が広く全国に広がっていった。
この神歌は、カミの徳を讃える歌または神祇に関する内容を歌ったものであり、広義の意味の神楽、神楽歌である。神楽歌は一般に宮中御神楽を称し、神言 (祝詞) を歌ったもの。短歌形態の歌謡であり、5 音と 7 音を繰り返す五七調と 5 音のみを繰り返す五五調で作詩してゆく。

この雅歌注釈にあたって、ギリシア教父のカルパシアのフィロ Philo of Carpasia (AD 400-450) の雅歌解説書を参考にした。フィロは 4 世紀末にギリシアのキプロス島カルパシアの司教であり、ギリシア聖教会によって祝われる聖人の 1 人。
謎多き聖人 (その生涯は謎多く世間に知られていない) で、作品には雅歌の注釈書がある。このフィロの雅歌はとても簡潔な文章で綴られており、他の教父の作品と異なり、雅歌全章に丁寧な解説がされており、序文にはキリストと教会の神秘婚姻について、教会の象徴はキリストの嫁として表現されている。
フィロの聖書解説は、聖書の隠された意味を解説してゆく方法であるアレゴリア (寓話的) 解説に、リアリズム (現実主義的) を通した非常に独得な方法で雅歌の隠された意味を探っている。

フィロの雅歌解説においての簡単な例文を紹介してゆきたい。

雅歌 1,2
どうかあの方が、その口の口づけをもってわたしに口づけをしてくださるように

フィロは、口づけを肉体的 (物質的) なものとみなさずに精神的なものとして解釈しており、乱れるままの魂に支配されることなく、物質的な愛と精神的な愛の区別であり、物質的、地上的な愛とは、実に世俗的で、金、所有、官能的な情欲に満ちたもので、精神的な愛とは開放された自由な精神で、繊細な感受性を創り、キリストの愛を象徴している。

雅歌 1,3

あなたの香油、流れるその香油のようにあなたの名はかぐわしい

かぐわしい香りがただよう香油とは、秘跡における塗油であり、かぐわしい名前とはキリストの存在を表す。キリストにまつわる香りの代表として、没薬 (ミルラ) があり、渋みのある穏やかな香りを放ち、新約聖書のなかではイエス　キリストの誕生をお祝いするために、東方の三賢者がミルラを捧げたとして、イエス　キリストの埋葬でも、香料が捧げられて、その１つがミルラである。
このミルラの香草は、キリストの血の象徴でもある。

雅歌　4, 2
わたしの妹、花嫁は閉ざされた庭
閉ざされた園

フィロの解説によると、悪魔にはキリストの刻印 (しるし) によって閉ざされた庭、しかし天上の夫婦には祝別された開かれた庭。庭の象徴は、新約聖書において復活祭においてキリストがはじめてよみがえり、顕れたのが庭であり、緑々した草花が生い茂るなか、新生という希望といのちがみなぎる。
庭とは、創世記のアダムとエヴァのいのちの樹といのちの水流れるエデンの園を思い出させる。

これより、旧約聖書雅歌を二句神歌として、独自に創作してゆきたい。

口づけは
愛にまさりて
ぶどう酒の
香りはなちて
かんばしく
尊し名前
おとめたち

あなたのあとに
まいりましょう
王に連れられ
喜び楽しみ
酔わされるまま
愛を讃えよ
おとめたち
真心もちて
あなたを愛す

エルサレム
娘たちよ
肌黒く
うつくしい
ソロモンの
とばりのように

日に焦がされて
われ見つめずに
怒る母の
子どもたち
ぶどうの園を
守る命受く

わが魂の
愛する者よ
群れを追う
昼のとき
休まるままに
告げてください
さまよう者の
群れの傍ら
ここにいる

おんなあり
うつくしき者
知らずまま
群れに従い
羊飼い
天幕おりて
子山羊飼う

愛する者よ
パロの車の
馬に似て

愛する者よ
うつくしく
飾りたて
あなたの首に

きらめく輝石

われわれは
銀を散らした
飾りもの
あなたのものに
つくらせよう

王着きて
われのナルドは
香りを放ち

愛する者よ
乳房に埋もる
没薬のふくろ

夜を明かしては
コフェルの花房
エンゲディのぶどう畑に

恋人よ
うつくしい
その瞳は
鳩のよう

恋しい人よ
うつくしいあなた
喜びよ
この床は
緑の茂
レバノン杉が
家の梁
糸杉が
垂れ木

シャロンの
ばら野の百合

おとめたち
恋人よ

いばらのなかに
咲きいでた百合

若者よ
恋しい人よ
森に立つ
りんごの木
木陰を慕い
甘いその実を
口にふくむ
宴に誘い
愛の旗をかかげよう

ぶどうの菓子で
われを養い
りんごの果実
力を与えよ
恋に病むゆえに

あの人が
左の腕で
頭を抱え
その右腕で
抱きしめて

エルサレムの
おとめたちよ
野のかもしか
牝鹿にかけて
誓いたまえ
愛が望むまで
愛を呼びさまさないと

恋しい人の声
山を越え
丘を飛び越え
恋しい人は
かもしかのよう

若い牝鹿よ

ごらんなさい
家の前に立ち
窓からうかがい
格子戸より
のぞくままに

恋しい人よ
語りかけたまえ

恋人よ
うつくしい人
来たまえ

ごらん冬は去り
雨は降り止む

花地に咲きいで
小鳥うたい
この里にも
山鳩鳴く

いちじくの実
熟すまま
ぶどうの花かおり
恋しいひと
うつくしい人よ
ここへと

岩裂けて
崖奥深く
ひそむ鳩
声こころよく
なんと愛らしいことか
顕れたまえ
聞かせたまえ

きつねたち
とらえるままに
ぶどう畑を
荒らす子狐

ぶどう畑は
花盛り

恋しい人は
わたしのもの
百合のなかで
群れを飼うひと

夕風が
騒ぎたち
影闇まぎれ
恋しい人よ
かもしかのよう
深き山より
来たまえ

夜ごとに
恋したい
求めても
求めても
見つからず
町めぐり
広場をこえて
恋したうきみを求める

わが妹
花嫁よ
閉ざされた園
閉ざされた園
断たれた泉
実を結ぶ
ざくろの森
すばらしい
香り草

園の泉は
命の水が
汲みだされ
レバノンの山より
流れでる水

北風よ
目覚めよ
南風
吹けよ吹け
園吹きぬけて
かぐわしき薫
恋しい人よ
この園を
わがものとして

みごとなる実を
口にするべき

妹よ
わが花嫁よ
園に来て
香り草
ミルラを摘みて

蜂の巣に
蜜したたりて
ぶどう畑と乳

友食べよ
友飲めよ
愛しき者よ
この愛に酔え

戸を開き
恋しき人は
立ち去って
言葉を追って
魂あくがれて

求めても
求めても
見つからず
呼び求めても
答えなく

夜警に打たれ
見つかって
打たれるままに
傷を負う

恋の病に
こがれにこがれ

曙に
輝く乙女
恐れるままに

りんごの木よ
あなたを呼んで
覚めるまま

あなたの母も
ここで身ごもり

刻みつけ
あなたのこころ
印章
あなたの腕に
また印章として

愛は死のよう
熱情は
陰府の酷さよ
火花を散らし
燃える炎

大水も
消されぬ愛に
洪水も
押し流されぬ

完

2025 年 5 月 18 日

フランス　アンジェ　平和　祈

旧約聖書　雅歌　愛の歌を二句神歌としてアレンジする試み

著　者　　小泉友美 Koizumi Tomomi

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社